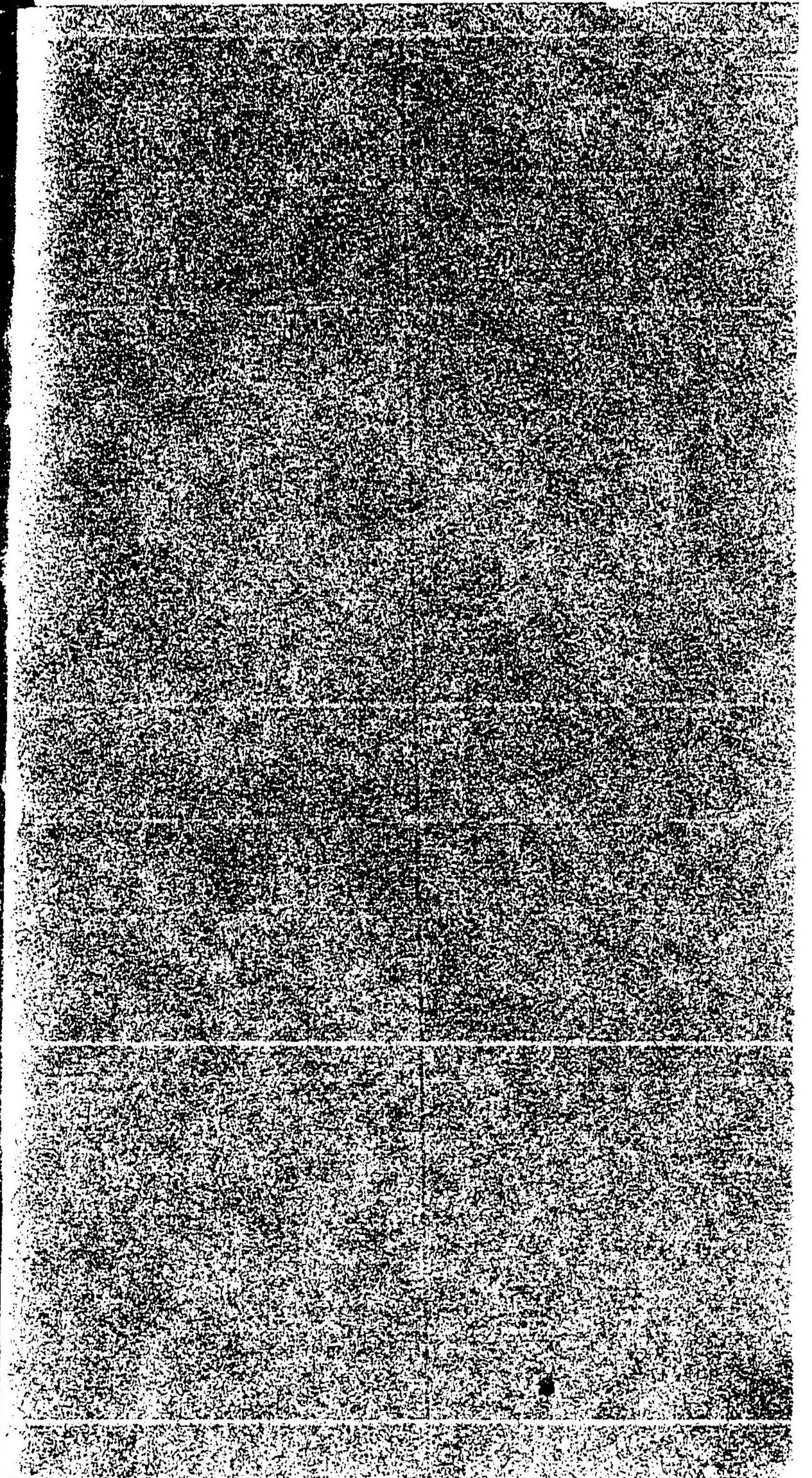
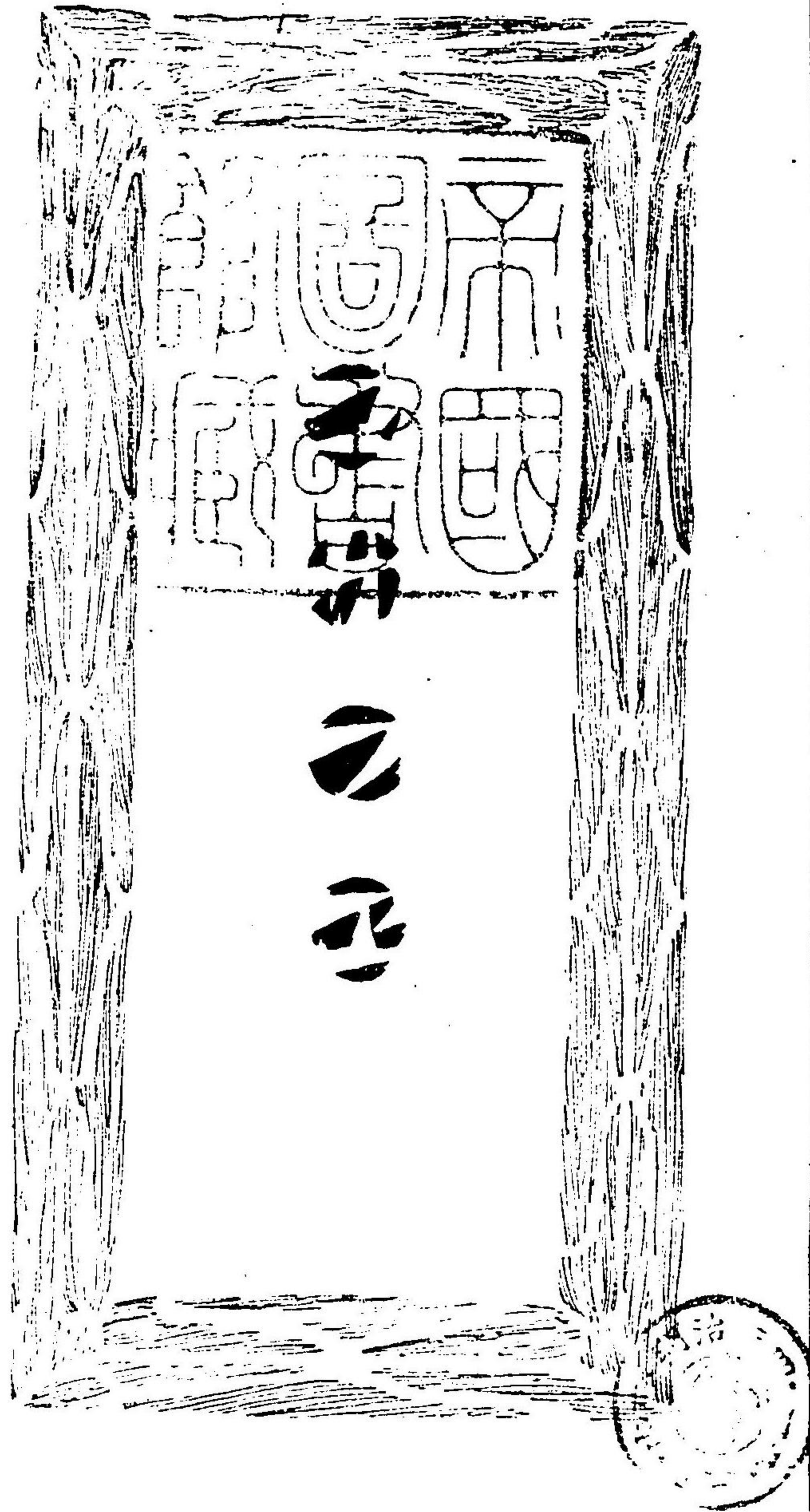
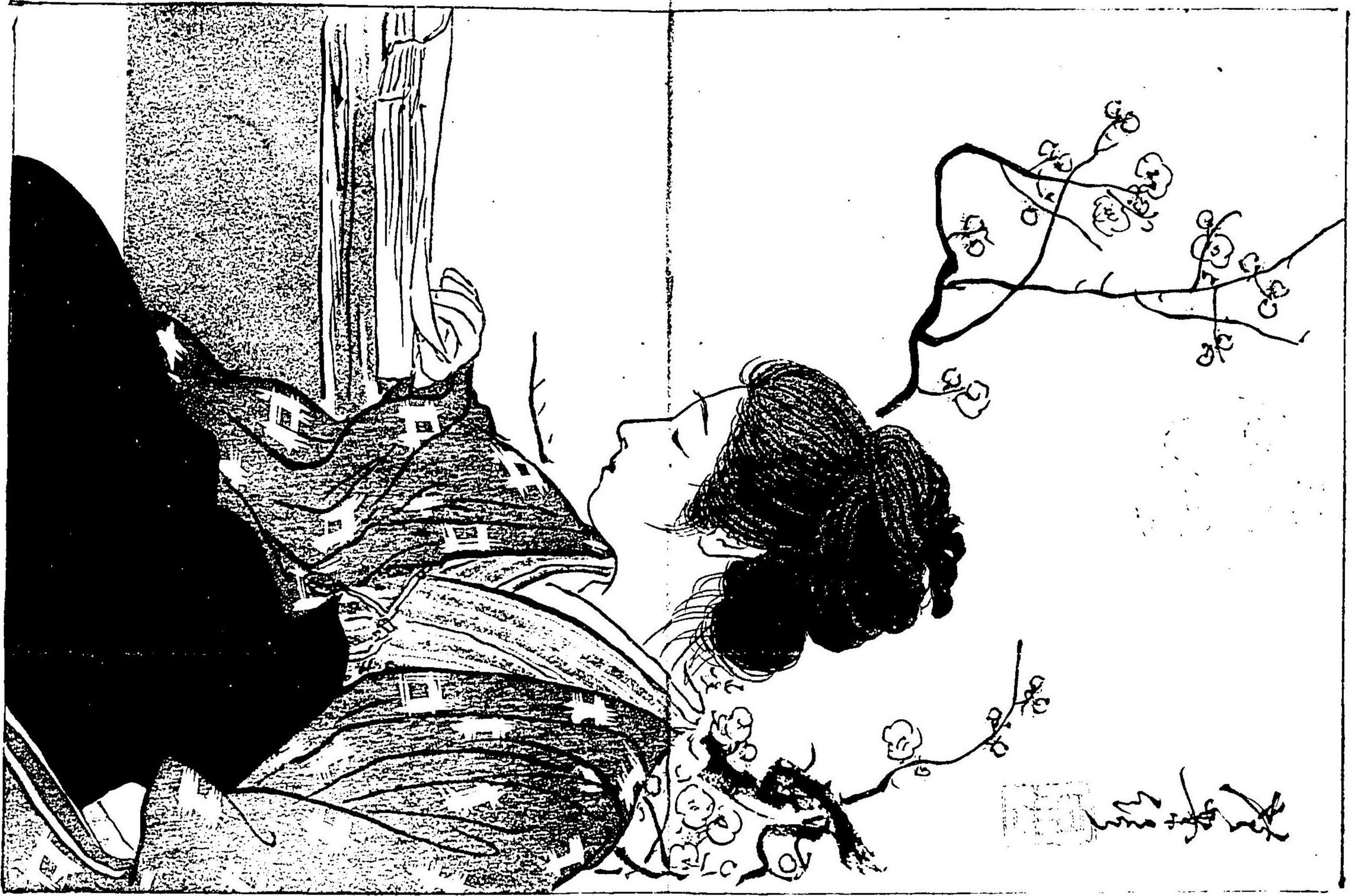


30-200





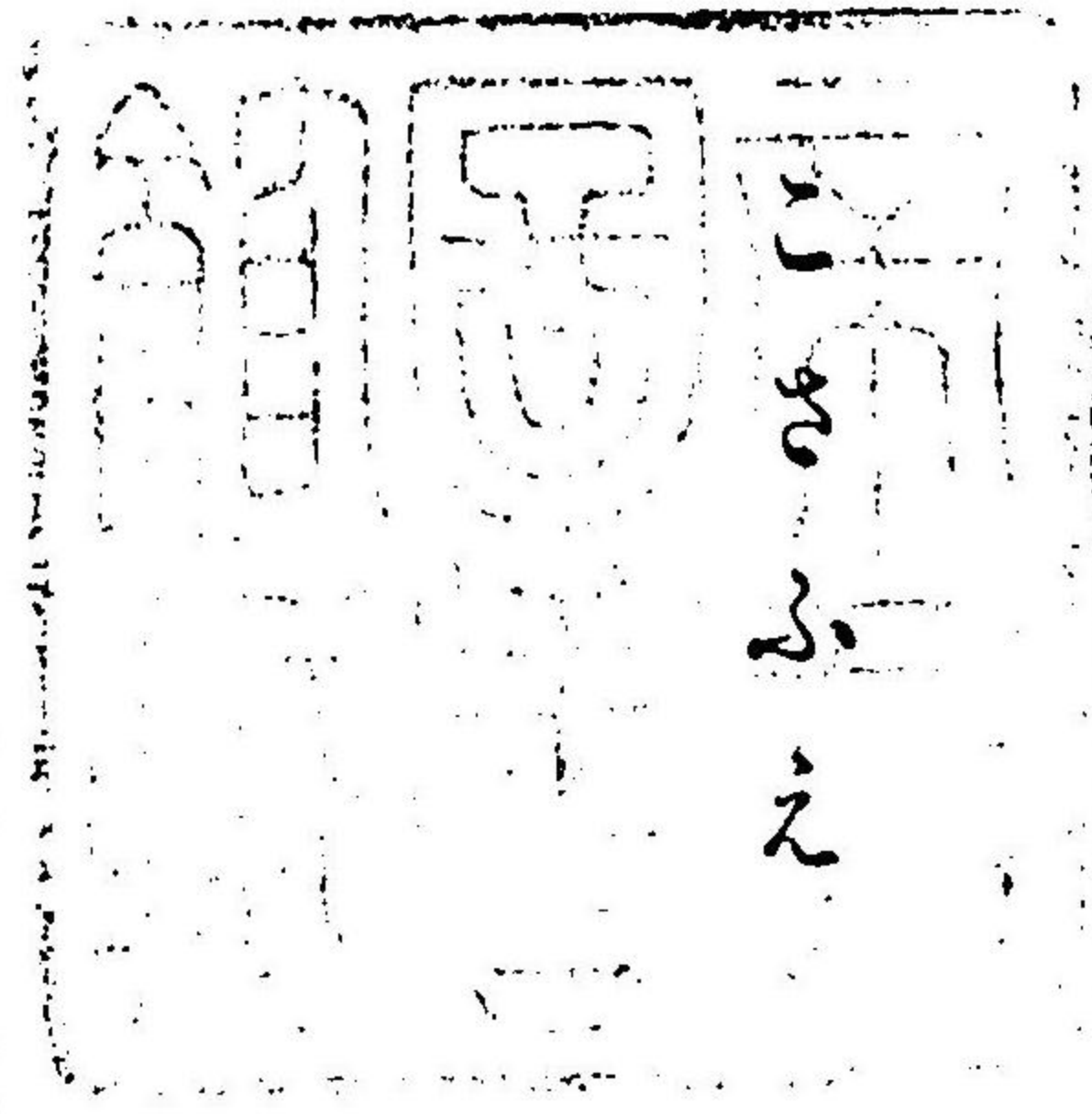
吾れに記録といふものゝ有るにあられば、いかなる
戯れことを書しや、又いかなる句を作りしやも、自か
らば知らでありし。

こたひ白鳩社より、新聞や雑誌に見えたる中の少か
を書抜かれて、梓に上せんといひ越されぬ。

讀もてゆけば、明治三十年以前、吾れの若かりし時の
作にして、稗き格調、世に出さむは好ましかられど、明
治三十年以後の句集「ぬれ鷺」編成しつゝあれば、吾れ
の詩想が「胡沙笛」と「濡鷺」とは、いかに異なれるか、詩美
の感念うつりかわる有様、まさしくと認められてお

かしかるへきが、
こさふえとは、異木の皮を以て作られたりとか聞く、
えぞ人のもてりし笛にして、吾れの格調胡沙笛の不
思儀なる音にも似たらむかと、斯くは題しぬ。

濡鷺堂に黄鳥の笙啼を聞きつゝ、
酒 汀



戯牛の巻(半歌仙)

秋元酒汀作

戯る、牛の尾細し春の草
徑うねく長閑なる晝

夏隣例の晝こゝろきさしきて

ふすまの骨を組に言ひやる

良寒み月に柳の影ほそく

氣もうとき程露の香たつ

逃られし鶉の行衛占はん

淋しかれとや遠山の鐘

(二)

水あひる女の肌雪の如

合點のゆかぬ雲よ時雨よ

蠟燭の流れてはつと火の走る

寐るにはましな裏町の寄席

(三)

月までときめた稿さいまだ半

なかく澁の抜けぬ串柿



虫賣は聾か知らむ爺むさく

賭碁するとはどうも啞らし

義侠心に弱きをかほふ花の陰

さわらは蜂の針を出すへし

(四)

壇の浦に春を迎ふて

壇の浦に初日を拜む涙哉

元日や瓶梅香裡屠蘇を酌む

拜領の具足も飾る御代の春

門松のかけに錢よむ乞食哉

門松に大日の丸のひるかへる

門松の影十丈の朝日かな
冠の影いと長き初日かな
新らしき曆に古き明治哉
玄關に御慶申すと大聲に
猿曳の子路によふ似た男哉
初空に黒一文
字
桔
棹

(六)

初雞や醒なむとする去年の酔
麻の葉に毬をかゝるや唄乍ら
草の戸に藁うつ音や春の雨
門前の小僧海苔干す海晏寺
白魚のあくまで黒き目玉かな
月朧梅のかふさる小窓かな

(七)



水にさうて春の月夜を謠ひ行
長閑なる雲井に鶴の聲す也
春雨の窓に歌集を寫す哉
山鳥のぬけ毛流る、春の水
春の月蹴鞠と見たる柳かな
世にすねて蝸屋に春の雲を睨む

春雨や海老茶袴のぬれて行く
霞けり孤村も畑を打人も
陽炎や畑に肥料を撒く男
松ひよろり梅しやちこはる在所哉
歸化したる異人や雛をいと愛む
病む猫の戀に鳴かさる餘寒哉

藪入の自轉車驅て來りけり
忍ひ男の踏みし跡あり落の台
瀬祭ありしかのこる魚の骨
菜の花の尽てだら／＼登る寺
海棠や杵屋か軒を雨細し
古渡人なく陽炎もゆる船の中

(〇一)

美しく印刷されし椿かな
霞から遠寺の鐘がぼんとなる
開業の球燈赤し春の風
霞けり由井も片瀬も江の島も
菜の花を縫ふて緑の流れかな
菜の花の果や破れし薪小屋

(一一)

菜の花や赤き旗見ゆ流行神
藪寺や鶯遠く日午なり
鶯の咽ふくらます朝日かな
長閑さや眞晝の鐘の只一つ
桃十里いさ、か青き麥の畑
椿拾ふ垂髻に椿落かゝる

(二一)

機織の音する桃の小家哉
提し花に蛇とまらんとして覺束な
のそり出て三日月白眼む蛙哉
墓なくやぼやつく風の吹く夕
朝霞十里の漁村横切れり
櫓聲高く霞を出る漁舟哉

(三一)



鶯は桔穀越て隣かな
鳥は雲に夕日は海に入らんとす
木鼠飛て白藤ゆらく山路哉
釣垂て邪魔とも思ふ柳哉
草のゆれ蝶とまらんとしては飛ふ
戯る、牛の尾細し春の草

梅か香やこの曙を唯一人
何者ぞ此梅にこの鉦のあと
谿越て炊烟一縷駒鳥の聲
春の雪達摩作れぬ恨かな
春の雪月の在りかのかすかなり
淡雪の竹にも積までお晝なり

藤の花ふらりくとは暮たり
ふらんこに倦て草つむうなる哉
青草や椿一輪散てある
山寺寂として彼岸櫻散る

波の色初日に赤き海原を鶴かと思ふ
白き鳥飛ふ
星ひとつ西にきらめく黄昏に海原は
るか魚躍る見ゆ
事たらぬ山の庵も自から秋にはとめ
る虫の聲かな

背負たる薪は重し家遠し日くれなん
として時雨ふる也

雪ちらく黒衣の僧都鉦提て柴を尋
に仁和寺を出つ

獵りくれて路なき道をさまよへば星
より小さき賤か灯見ゆ

(八一)

矢さけひに荒れあらされし遼東の野
黍枯れたるに霜只白し

明星の淡く残れる野は廣く霜白うし
て蕎麥の莖赤し

(九一)

筍に木戸鎖れたる山家哉
少々と袋に書し新茶かな
表札は別野とのみの牡丹かな
庭に来て老鶯の鳴かて去る
兩岸の芦や柳や行々子
煎茶賣る軒や小旗にさらく餅

(〇二)



鮎釣て村酒酤ふへく月もよし
蝙蝠の動きもやらぬ真晝間
ほたり落て死たかと見る蝸牛
むくくと縁に這よる毛虫哉
蚊一つに遂によふ寐すしまへけり
蛭とれば血しほ流るゝ妹かすね

水長く青田萬頃月すゞし
松火を衛士の持出る毛虫かな
夏瘦の肱を枕や宵月夜
氷餅齒か痛いかと思ひけり
夏の野や遠山雲を吐くしきり
城破れて唯夏草の茫々たり

(二二)

涼しさや泡沫白き沖の岩
蚤一つ遂に飛れし恨かな
夕立たんとして池に鯉の躍る音
時鳥淀の曙雨かふる
背負たる薪は重し杜宇
溪越て石奇なる處百合のさく

(三二)



古池の水たゞならず杜宇
雲は北し水は南すほと、きす
子子のあとより沈む松葉哉
耕輟て牛を追やる夏野かな
戯れに目鼻書たる團扇哉
梅雨の窓眼鏡の翁篆刻す

馬洗ふ夕貌棚や薄月夜

芥子の今散りしは蝶の仕業かや

花菖蒲米とぐ水の行方かな

水を掠め翡翠飛去る橋の下

水打て燈籠の灯を愛す哉

河骨の水を抜け出る葦二寸

廿五

水汲めは釣瓶に桐の花古し
棹さ、で水にまかすや涼舟
月涼し更て水汲む隣かな
梅雨晴を舟は帆揚るけはひ也
梅雨晴に古ふんどしを洗ひけり
蝙蝠に石なけくれし河原哉

(六二)

悠然と白帆うまる、青葉哉
卵の花の垣からのほる釣瓶竿
芥子の花黒き大きな蛇の飛ふ
水打て凹める石に月を愛す
晝寐してマツチ毀れたる袂哉
苔むした石碑とりまくつゝしかな

(七二)



米洗ふ下女の手黒し杜若
葉を曲て黒蜘蛛潜む杜若
月細き夕若竹に微風あり
若竹に蜘蛛の巢光る月夜かな
水ちよろく葉柳の根を洗去る
卯の花や奉謝いたゞく小順禮

一歩つ、汗をふみ出す野路哉
一聲は鳥邊のあたりほと、きす
つ、し多く大きな石のある小庭
新聞を握たまゝの晝寐かな
寐た嬰兒の蠅を追やるうちわ哉
來よくとうちわを叩く螢かな

山寺の鐘撞やんて閑古鳥
草の戸や曲突も厠も青嵐
竹の子の強きか皿に残りけり
大江戸やちよいく見ゆる若葉山
年間は團扇ひねくる雛妓哉
蚊帳を出て月に笛ふく一人かな

(〇三)

蝶なくや閑居の月の曇る夜に
蝙蝠や石にもならぬ楠のうろ
蝙蝠や三日月細き富士の山
蝙蝠や江口の君の乳黒し
蛇一つ閑を貪る牡丹かな
朝風に牡丹すれ合ふ園廣し

(一三)

うちかけの牡丹燃ゆる白柏子
雨急に芥子は坊主となりけらし
かくや姫在すか月の今年竹
筈のそろりとごみをもたけたり
黒塚に落書白し桐の花
お手つきの局籠るや桐の花

(二三)

卯の花のちるや土龍のもりし土
虫干の歌書并へたり庭の石
拈香の窓に玉卷芭蕉かな
額堂に大蜂うなる若葉かな
仰向けは蛇ふら下る若葉かな

(三三)

好古會の祝として

虫干や古鉦の響只ならず

友人の父を失ふに贈る

若竹の葉末の露と思ふべし

一八に馬の嘶く薄暮哉

(四三)



晚鴉點々僧一人行く花野哉
三井寺の大鐘うなる野分かな
鴟なくや破砦の上のくねり松
淋しさに酒暖ためむ秋の雨
鶉啼く小野の夕暮人見えす
朝なく露大粒となりまさる



三尺の芒二尺の地藏かな
月よりは一尺高き芒かな
月は今丁度す、きの穂の處
秋のくれ心細さの風か吹く
眉青き寡婦美しや萩の宿
萩の花主は貧の琵琶法師

水ちよろく薄折れふす漉
夕紅葉牧童の笛聞こゆる
夕榮の紅葉にのこる溪路かな
路盡て茶毘の火煙ふる芒哉
稻妻や美女の亂髪おそろしき
稻妻や半鐘黒き火の見台

への字くの字さて稻妻の面白や
良寒み日和もてくる京の鐘
柿剝て小刀を置く盆の上
小刀の錆たるを貸す菊の宿
朝寒や明星光る城の松
炭竈に小猿のさけふ夜寒哉

(八三)

父を失ふて
白露や涙かと眼を拭ふたり
天長節の日に
普天率土菊かんはしき旭かな
君か代や菊の露吸ふ戸毎く
冷たさの手をすへりたる豆腐哉

(九三)

野はくれてそろく月の庵かな
留守に来て名を書残す糸瓜哉
虫なくやぶら下りたる青瓢
提灯に虫の飛つく野路かな
露の玉避雷針の眞先に
洪水の跡まさまさと秋の川

(〇四)



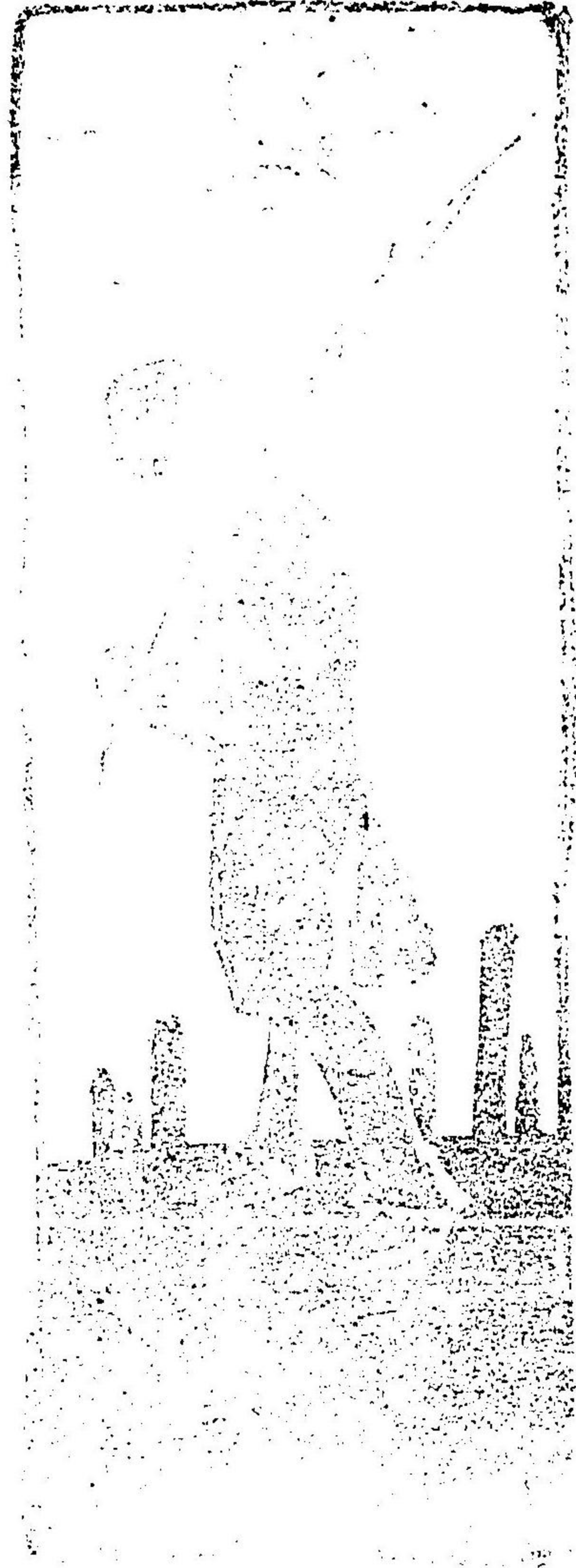
かけ物のうしろに一夜茶立虫
たまくに地藏貌出すす、き哉
家鳩の夜すから唸めく夜寒哉
月更て瓦に露の玉白し
花火消て星けろりと光る空
隣村の花火見て居る二階哉

螳螂も面くらつたり屁ひり虫
こふろきの秋面白と啼なめり
蜻蛉の蠅を追ふてやもとの枝
秋風にやもめの蝶の吹れけり
未枯や鵝じれつたさうに啼
柿の木に和尚自作のか、し哉

(二四)

おんぶした蝨落たり溝の中
いみわれた柘榴こほる、野分哉
一椀の新酒にうこく詩腸哉
卒塔婆の倒れてあるや雁來紅
鶏に僧都物言ふ葉鶏頭
夕月に馬子歌歸るそはの花

(三四)



木啄を追ふや庵のはねつるへ
朝月の白う残れる萩の花
椋鳥の群つて飛ふ秋のそら
獨樂にすへく竹釘徹す木實哉
柿買の來て馬譽る山家かな
沙魚釣の歸る夕やいわし雲

出しぬけにホヤにひゞ入る夜寒哉
芒穂に茸とうして來りけり
後の月猪子雲飛ふ宵のほと
駒の小徑横切る秋のくれ
鬼念佛亡き兒を思ふ夜寒哉
啄木鳥に猿の驚く梢かな

雀飛て吹矢それたり黄なる柚

(六四)

朝露

野分の吹荒ひたる朝はらけ、澄に澄た空は高
く、満目荒涼たる露の野を、行くとしもなく行
は、永劫の夢の人を、埋めたる墓碣の陰、無名草
のひよろひよろさして、やもめの蝶の白く小
さきか、花にすかりて飛も得ぬなそ、

(七四)

秋風にやもめの蝶の吹れけり

秋知らて茂りたる椎か下には、まだ色褪ぬ蒔

掛したる、六體の地藏あり、未だ母か涙の乾か

さる、嬰兒の塚やあるかと、叢にはこふるきの

沈寂な韻律で唱ひ出すなそ、

こふるきの秋面白と啼なめり

(八四)

芒や女良花か亂れ亂れて、芒に没したる破家

は、道行く人の笠の如く、人も至らぬ壞れ碧の、

くれりたる一本松には、鴉がぢれつたさうに

啼き、天地寂たるなそ、

鴉なくや破碧の上のくれり松

晩稻も刈盡されて、破れ破れし案山子は、晩秋

(九四)

を知らせ顔に眸に在り、遠き暇か家の炊烟は、
褐色に衰へたる小高き山の樹々を掠めて、い
と静に白く、一群の村童楠公を唱ひつゝ、獨木
橋を渡り行くなぞ、

(〇五)

村童の土投げつけたる案山子哉
世を拗れし親友を訪ひは、戸は開け放たれて、

竈も燃てある、茸狩にか柴さりか、呼へとも音
するものは、釜の湯の沸るのみ、軒の糸瓜は屋
根にまで、蔓の至れるなぞ、
留守に来て名を書のことす糸瓜哉

(一五)

虫 聲

僕が柴門を出たのは、澄渡た空に星が霞小紋
のやうに散らばつて、月もなく虫撰りには詠
ひ向の夜であつた、

遠き林間の一家の、風に動く灯を見つゝ、木
立を過て草生茂る小徑を行けば、虚空に唯一

(二五)

聲、カオ、思はず首を縮めて、天を仰げは又た
一聲、始めて五位鷲と知た、翁か稻妻や暗の方
行く五位の聲の句は、如何にも調和のいゝ句
たと思つた、

(三五)

まもなく大きな星が、北から南へ淋しい餘光
を曳て流れ、細い悲しいやうな死の神か呼ぶ

のかと思はるゝ、スーイ、スーイと虫の聲がす
る、いかにも餘韻のある鈴虫や、氣短かなやう
な殺風景な響虫、齒の浮くやうなきりくす
か、聲は野に満ちて草が啼くかに思ふて、捕る
すへもなく聞惚て、居た、

(四五)

我は天人に伴はれて奏樂を、聞かされて居る

のかと、ほんやり佇て居たか、思ひついて鬼灯
のやうな、赤い提灯に火をともし、今まで鳴
き競て居たのが細く長く斷續して、虫は提灯
にメラメラと飛ついて、貴賤貧富に厭姑の別
なく啼て居る虫は、袋の中に黙して窮屈を忍
はねはならないのだ、

(五五)

寐ながらに虫聞く詠の住ひかな
提灯にきりぐすなく野路哉

鱸釣

長さ二間まてはない小漁船へ、釣道具襪、握
飯、火鉢なそ残りなく準備して、船を流れに任
せて、鱸釣にと志した、

(六五)

日は没して西から北にかけて、幾個となく立
て居る雲の峯を彩色して、兩岸に暹る芦に夕
風の渡るなそ、いかにも涼しく、蝙蝠の一つ二
つ船を掠めて飛なそ、實に詩趣た、
煙るか如き柳、柳にもたれかゝる渡小家も、船
の去ると夜の歩みの進むので黒幕に掩はれ

(七五)

て、船腹を洗ふ水音なぞ何となく瀟氣味わる
くなつた

眉の上には何さいふ星たか、勝へ染みこむや
うな光を放ち、洲に泊するふれの灯は豆の如
く、今まで濃淺黄色の雲峯は、稍や色を深めて
集合して、廣き空の半を掩ふて來た、なりく

(八五)

雲間を洩る、電光が、への字くの字を書習て
居る、遠電は雨を呼はすと聞くから、寧ろ面白
く、瀬を曲り柳をく、り碇を下したのは、何所
の梵鐘か數ひ盡せば九時を報する時であつ
た、

(九五)

釣針を流して獲物を待つや、船が止つたから、

右からも左からも、饑た蚊が襲ひ来て、顔を拂
ひは襟、襟を拂ひは耳、それも微音たも禁する
夜釣、叩かれもせず唯た追ふ斗りた、
夜は更る、岸を洗ふ水音は悪魔の囁きかと疑
はれ、芦の戦くは狐狸にあらずやと、吾れ知ら
ず振り向く……この淵には昔里見の住は

(〇六)

れし時、梵鐘落て埋み、風なきに水湍急となり
崇をなすとの事、五月雨の頃は白衣の美女岸
に立て泣くことありなぞ、とりとめもない想
像か交々と湧て来て、思はず後ろを見ると水
に浮て船に迫て来るものが有るので、襟元か
ら水を浴ひせかけられたやうに覺て、思はず

(一六)

身震ひした、段々近づくのを熱視すると、七夕の祭竹で有た。

手を衣に觸て見ると、露の滴たらむ斗りである、ハヤ歸らんかと思ふと、竿が折れんばかりに曲た、いかにも大魚らしいから、鉋を揚げて船を流しつゝ、糸を手繰た………何時の間

(二六)

船は岸に寄たか、杭へドゥンと衝當た、不意の出来事のために倒れると、水音高く魚は躍た、周章て起上ると、竿は軽く糸は切れてあつた、星飛ふや鱸釣たる竿の先

(三六)



風呂敷を洩る焼芋の煙白し
年のくれ壁に慷慨の詩を題す
薬園に狐聲悲しき霜夜哉
松に積る雪を蹴落す鴉かな
南天に鶯なく寺の小庭哉
風も稍吹落て晚鴉飛ふ

乾 鮭の片荷は一升徳利かな
かさくと雞の求食る落葉哉
禪寺に米搗音や批把の花
霜白く南天赤き小庭哉
高 广狗のしやつ面た、く落葉哉
霜の朝鳥船から杭へ飛ぶ

水鳥の汀に眠る小春かな
山茶花に朝日冷たし罄の音
明店の柱に古き曆かな
雪踏て雪見に行や雪の人
運座から歸れは火なき巨燧哉
化さうな釜ぶら下る櫓の宿

(六六)

桃太良を孫にきかせる巨燧かな
婆々達の色さんけ聞く十夜哉
翁忌や庵の枯木に鴉なく
迷子の辻になき居る夕時雨
霞ころくみな飛石をころけ落
雪空や徳利さけたる人の行

(七六)



雪晴て松まん丸な旭かな
風の夜は吹落て鐘淋し
落葉して五重の塔のあらは也
棗干す漢匠か門や枯柳
厭世詩家住むか枯野の一軒家
落葉掻き落葉焚き居る僧都哉

冬枯の野末柿持つ家十戸
鉢浅く水仙の白根大なる
庭隅に水仙のひて花もなし
綻ひんとして春待つ梅の苔かな
水仙の一輪さきし冬至かな
盆梅の咲かうかとする冬至かな

青枝のすいくと立つ冬の梅
ふとん干してころりと寐たる法師かな
大佛の頤に二本のつら、かな
枯芦や目にく風の騒はしき
松の雪落て犬吠ゆ夜もすから
十月や日南に小猫蠅を追ふ

(〇七)

月更て小さく見える霜夜哉
熊捕た手柄話や櫓の主
晝成て肉池あた、む火鉢かな
月小さく更る木末や鼻なく
粥を煮る音ちぶくと寒の入
梵鐘の半面くろし冬の月

(一七)



文を賣て酒債償ふ年のくれ
木兎曳のしらはつくれて歩みけり
燈籠の火袋を出る三十三才
御垣守る衛士の火を焚く霜夜哉
麥飯に汁あたゝめる楯火かな
ものいはぬ床の達摩と冬籠

年忘れ三味線弾て見たる哉
冷たけに門の霜ふむ乞食かな
寒垢離の密に戀を咒ふらし
茶の花に飛ふや小春の虻一つ

瘋癲牧師

毎日學校へ行く途すから、とうしても不思議
てならぬ事に、急度邂逅した、始の程は氣にも
止めなかつたが、殆ど半月も一月も、更に變る
ことがなかつたから、さあ好奇心と人の情と
は妙なものて、どうしても不思議の源を發て

(四七)

見たくなつた、さうすると取止めもない想像
が、いく筋となく起り來て、不思議といふこと
に心は支配されたかのやうで、いつもの時間
にいつもの道を行けば、イツモノ不思議はど
うしても不思議だ、

(五七)

人に見られないやうに、杉の生垣に寄りさう

て居れば、足は自分といふ感はなくなつて、な
んだか悪事でも働たかのよふに、怖ろしいや
うな氣かして、モオモ一人の秘密は探るまい
と、暫く心は主配主を失ふて躊躇した、學校の
始業のベル、眸を隔て遙かに聞こゆ、

* * * * *

(六七)

君は近頃、活潑な氣性に似けなく、物案しけな
様子じやないか、輔けもし助けらるゝも朋友
の親じやないか、盜賊を働た次第もあるまい、
姦通罪を犯したでもあるまい、包ます話し給
ひと、心情籠た友人の言葉に、血液は静穩を失
ひ、顔は稍や熱して來た、ナアーニ取調へもの

(七七)

で二晩斗り、熟睡しない爲たらうと、言紛らし
はしたものの、心はとがめて穴にでも入りた
く思た、果はラプ的の御心配だナアと言られ
て、とんだ濡衣打明けてしまいと決心した……

……實はこゝにいふ事實さ、君も知て居るたら
うが、あのメレ淨源寺の角に杉の生垣をぐる

(八七)

りと廻した、表札も何もない冠木門の一寸と
した家かあらう、あの家へ一ヶ月斗り前に引
越た人物が、抑も僕をして不思議の念に堪え
さらしむるのだ、一成程あの家の小指が……
解つた解つた――

(九七)

そんな次第じやないのだ、僕か毎朝あすこを

通ると、必ず不思議な事を耳にするのだ、先始
がけた、まじゑ聲で、アラ／＼許してくれ全
く己れが悪るかつた、といふかと思ふと大き
な聲で笑ふのだ、それを三度も繰返すと、四十
五六とも見える丸髻の、ぼちや／＼した一寸
あか抜のした、奥さん風の女が井戸端へ来て、

(〇八)

水を汲ては拜み汲ては拜みして、妙な手つき
をして屈んだり立ったりする、暫くして家へ
入ると、又た男の聲で尤も森嚴に、何たかわか
らないか、演説でもあるかの聲かする、聲か絶
ゆるかと思ふと、ドチバタ／＼組うちてもあ
るかの音かする、其れか止むとまるで人住む

(一八)

家とは思ひぬほと寂として、釣瓶から井戸へ
落つる水が、時々ボチヤーンと聞ゆるのみ、三
時間でも五時間でも一日でも、其刻限になら
ねば、人の聲はボツツリともしないのだ、何て
も深い遠因もあらぬ、しさいなくては叶はぬ
、ドコマデモ其秘密を發き不思議の種を見

(二八)

届けんと、今日も不思議を探らむとして、始業
のベルで断念した次第さ、………君も随分
馬鹿氣た男だつもられい事をしたもんだ、僕
はあの家の事情とアノ人の資性を知て居る
よ、ア一話さうか、一あれは君も知て居さうな
もんだ、アノ牛込の某教會へ出て居た牧師だ、

(三八)

モトへお抱へ車もあり、下婢も三四人使た人
だが、英國人でも佛人でも僧侶でも神官でも、
人間は人間らしい、慾もあれば情もありで、悲
しいかな戀といふ魔を制するの勇なく、其頃
美人といふ程ても無つたが、下婢としてま
づ稀な廿年斗りの、品格の立優た、嬢様風の女

(四八)

か居た、——いつしかアアメンの句で落城
させ、これもゴツドのお手曳かと一人ほくほ
く悦て、會堂へも手を携て往く始末、いかにも
眞面目なる牧師だけに、妻も訝からす人も疑
はなかつたが、因果は忽ち袖にも隠くせぬ次
第となり、假面をかぶつた丈に、牧師だけに、心

(五八)

配で心配で鬱々として、會堂へは勿論病と稱して人にも達なかつた、さうなると憎いのでは無論あるまいか、自分が其罪を犯したと思ふよりは、相手に犯さしめられたかに思ふて、ふよりは、相手にはつゝぬぞ言葉も換せなくなつて、しきりに悶て居るやうであつた、………相手と

(六八)

いふのは武藏の何村とかいふお寺の娘で、行儀見習といふので、あすこゝに住込むやうになつたので、親僧は非常にきびしき男であるとのこと、………牧師も始はお寺の住職なその娘とは知らなかつたに相違ない、それと聞て娘は腹部の所置に苦んたのらしい、娘は女心

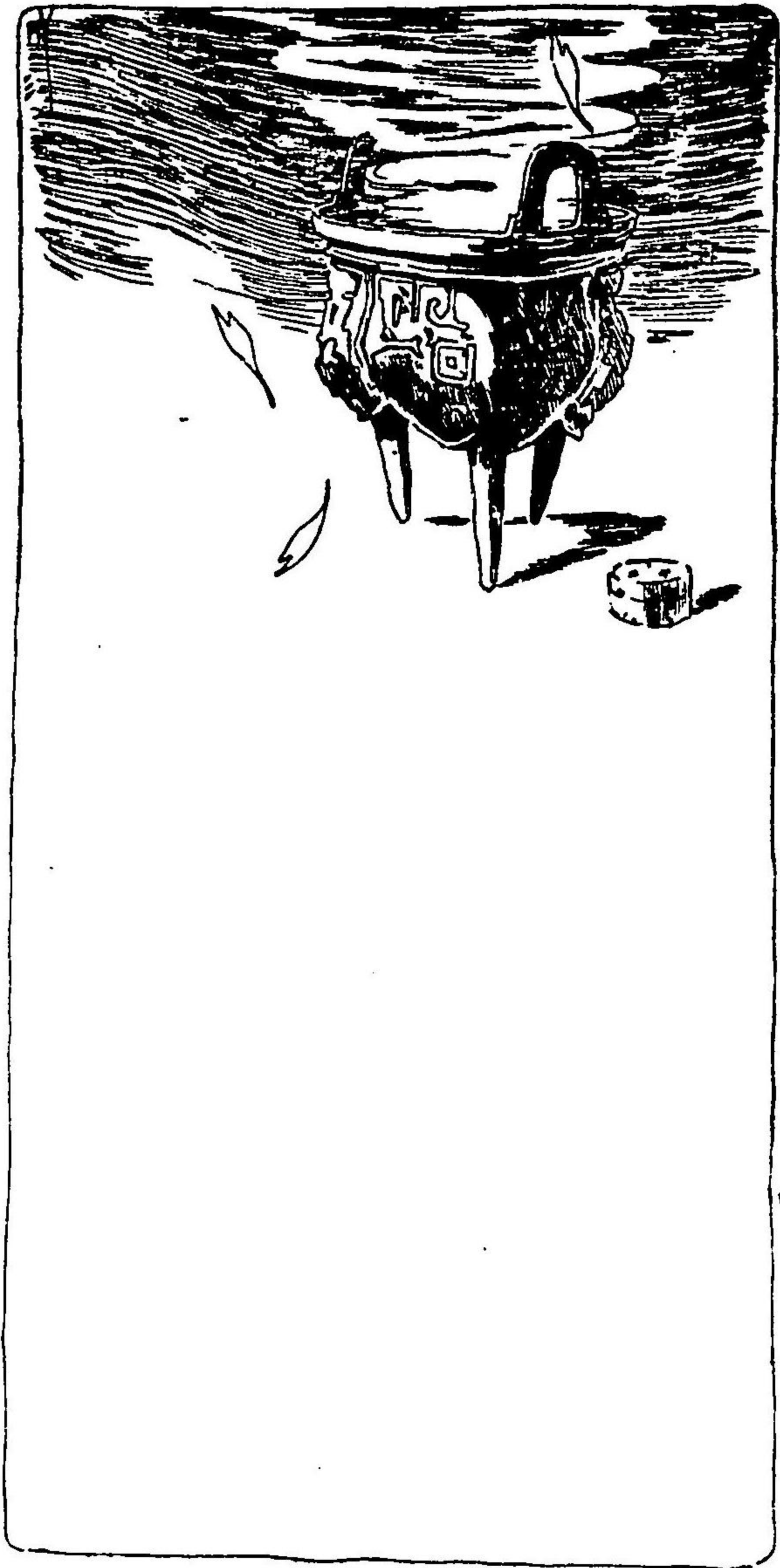
(七八)

に主人の打て異つたる邪見と、親の嚴格なる
に、思ひは主人か情の濃やかて有つたのとい
かに情か濃やかにもせよ主人一而も妻ある
を知りつゝ、どうしてこんな罪を犯したか、腹
部のことを話さなんたら、なぞ揉返しく悶
ひ居たのが、取止めもない獨言を洩すことも

有つた。

* * * * *

フイト家を出て夕暮になるも歸らなかつた
が二日斗り経て、關口の瀧に孕女の身投げか
有たとの評判があつた、原因は其爲らしいが、



悲哀
(上)

四十五六の女は牧師の妻で、あれは井須といふ氣狂ひ牧師だ！

神田松住町の裏長屋へ、親子唯た二人て、十日
斗り前移轉て來た者かある、其も女斗りでッ
イソ男の影は見えぬのだ、母らしいのは結び
髪て一寸垢抜けのした、眼は底光りしておち
つかないやうな、娘らしいのは顔形ちから風
采から、中以上に暮せし者のなれの果かと思

はる、可哀想なのは兩眼………全く失明なの
てある、破れ果た三疊一間を吾家の、その隅の
方に煤ほうけた火鉢がある、母なる人は火鉢
にもたれ、娘の顔を覗きながら、

「おきんや此所もなんだか、先居た所のやう
に薄暗い―陰氣な引窓のあたりで笑ふ聲

(二九)

が微かにするぢやないか」

「阿母様又始たの、それは氣のせいだから、そ

んな筈は無いと思つてよ、………妾には

盲目で陰氣も見えないせいか、お隣の月琴

が面白そうで、大變に陽氣だと思ふわ、つま

らない事を考へるなおよしなさいよ―妾

(三九)

たつて悲しくなるわ。」

「だが鉄造はあゝいふ譯になり、阿父さんはあんな馬鹿をしたので、裏店住をするやうになり、世間の人か笑ふだらうと思ふと、ドゥモ曳窓あたりで笑ふこゝろがして、氣のせい斗りとも思ひないよ。」

(四九)

「阿父さんはあんな女に詐された斗りて、財産も何も人手に渡し、女房や子の路途に迷ふのも構はないで、あげくの果か鐵道往生……鐵造だつてさうだわ、贖物を頼まれたつて、悪るい事と知たら、辭てしまいは可のに、知れまいと思ても天道様が許さない……」

(五九)

……そんな親を持ち、あんな亭主を持たから、
コ―いふ始末になつたので、又浮む瀬もあ
るだらうし、何も笑はれる筈はないでせう
よ」と

(六九)

勇々しくも言のけたが、下うつ向てぢれつた
さうに、前垂をひき断んまでに揉て揉て、

りと膝に一年、母も堪られぬかのやうに、

「妾も考ると―勝もちぎる、やうだ、父さん
は今いふ通り、鐵造はあの始末、可愛子は失
明―その目くらの手一つて養はれて居る
といふのは、情ないア―情ない、だが鐵造は
苦い中に、お前の眼を何様かして癒してや

(七九)

りたいと、新井の薬師へ絶物したり、醫師に

かけたい斗りに、淋しい了見にもなつたか

と思ふと、な……さ……けも仇怨むまい怨むまい

後は聲もうるみて、少しもわからず、二人は泣

きくつをれてしまつた、母はすつくと立てき

んや／＼誰か勝手に笑て居るよと振向た、聖

(八九)

堂の森に塙もとめて啼く鴉、四つ三つ一つ暮
昏る、

(中)

夕食をすまして娘は笛を袂に、

「それぢや行て來ますから」

「能く氣をつけておいで、まだ慣れない道だ

(九九)

から」と

出て行く後姿を見て、吾れ知らず可哀想な娘
だと、口へ洩した。地は凍て下駄音高く、北風霜
を呼び、まだ初更なから萬戸戸を閉して路傍
の柳風を含み、電燈はうす白く淋しく地に落
ち、人影も稀となりし萬世橋を渡り、錆た淋し

(〇〇一)

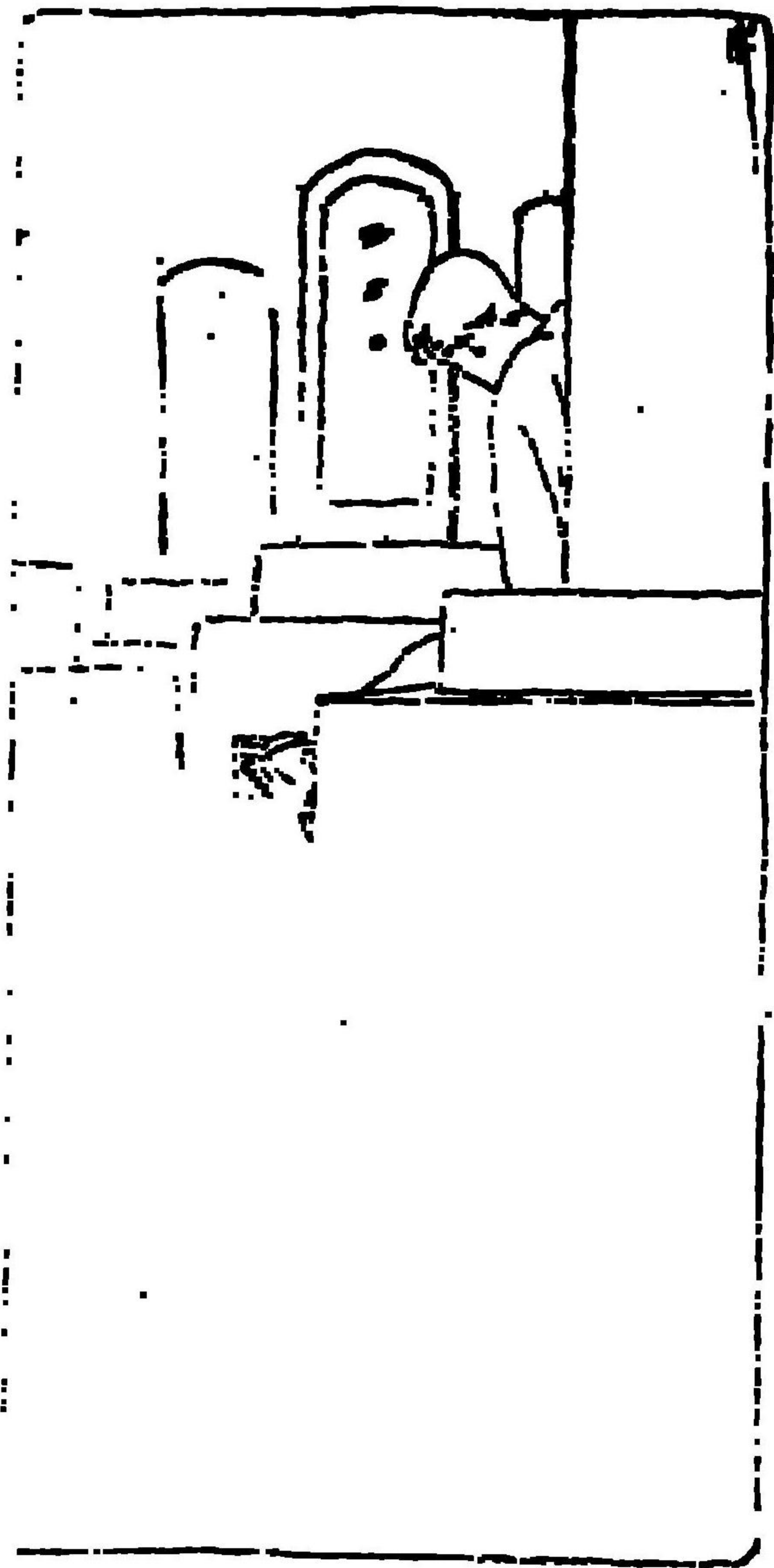
い節で、

「按摩かみしも五百一モン」

* * * * *

おきんは呼止められて、旅人宿と齊た家に伴
はれて、奥の奥のズツトの奥の客間、挨拶も震
へなから、揉始めた、

(一〇一)



「按摩さんは松住町か、それじゃ近いなあ、あ

松住町ぢや近いから、殊に同業だから知て

も居やうが、湯島から大へんな盗賊かつか

まつたなあ……………」

「左様ですかチットモ存しません、何様な悪

者ですか」

「今日の新聞を見ると、妻はお前のやうに目くらだ、其妻に樂させたいので、酒斗り呑て居る、家の爲にならない、養父を殺してサア、放火強盜あらゆる大罪を犯しちやあ養母と妻を養て居たさうだ、養母といふのは氣狂で其男は西山鐵造てい野良ださうだ……」

「イー西山鐵造」と

思はず聲を洩した。

「按摩さんも知て居る人か」

「そ……その妻といふのは妾の朋友です、只

臍物を頼まれて賣たとか聞て居ましたが、

そな悪人ですか……」

(四〇一)

と言ひ紛らしたが、手もわなゝゝゝて居る、洋燈

に映する顔色、血を失て寒ひ斗りてもあるま

いと見えた、やがて暇を告て旅人宿を出たが、

心は麻のやうに亂れて居るから、寒さも忘れ

歸るへき方向も忘れて、お茶の水橋で巡査に

聞た、進まぬ足を運びつゝ、獨ごとときれく

(五〇一)

に、

「あ、情けないー妾は一生按摩で満足だ、阿

母様一人位はこの瘦腕で……まだ二た月と

添はぬのに聞くも恐ろしい大罪人ーイツ

ソ獨身で暮したらー阿母様もい、雙だ心

切者たと仰しやつた、この頭巾もこの帯も

さうして見れば、臟物が、鐵造は大罪人だと

阿母さんに話したら、病に急度さわらうし、

左様いひは阿父さんが、隣の鐵か眼は怖る

しいと、人殺しでもしさうだからよせと……」

いくらもあらぬ松住町、吾家の門に佇は、母は

寐れしか物靜か、戸の音に母は目覺、

「歸たか寒むかつたらう、早く上つて暖た
ま
れ」と

火鉢に手をかざしたが、底の底まで冷えきつ
て、道邊の土と異らない、時しも上野の方より
ホーンと響く鐘は微かに、天上を走る鼠の音、
イヨ／＼淋さを重ねた。

(八〇一)

(下)

娘は事實参考人として召喚せられた、母とい
ふのは狂ひに狂ふて、けたいましい聲で、笑ふ
のは誰だ誰だ、「人を笑ふなら百になつて笑
ひ落ちれば同じ谷川の水じや」何ためわから
ない事をいふかと思ふと、この寒む空に裸體

(九〇一)

となつて表に飛出したり、それが三晩も續た
後朝おきんは長屋の者を頼んで、警察へ綜索
願を出した、もとより按摩の瘦腕、夜も晝も
も商賣に出ないから、食はず吞まず、風ても引
たか力ない咳が絶す聞こゑる……隣
家主では月琴も弾き止んで、ひそく語るを

(〇一一)

聞けば、

「こんな来た按摩にも困るぢやねいか、敷金
も入れない内に、氣狂は飛出る、とても店賃
は取れまいと思ふから、可哀想なか店立を
せにやなるめい」

(一一一)

「さうですとも、かゝりあいのない内に早く

追ひ拂ふがい、ですよ」

薄情めと齒を食ひしけつて、おきんは立上つ

たが、盲目の悲しさ、うつ伏て泣た………其夕

くれおきんは店立を嚴命された、是非なく笛

を袂に杖を力に、泣く泣く露路を出た、見えぬ

なからも怨めしさうに、二度三たび跡ふり向

(二一一)

て、松住町の角を曲ると、ヒーと細き笛の音が

聞えた、

* * * * *
* * * * *

(三一一)

夕暮近くなると淺草山谷の、本貸宿さ記され

た薄暗き掛行燈の影から、瘦せほふけた女按

摩か、雨の夕も風の夜も、自分の運命を露はせ
る、折れかゝつた細き杖を便りに、小塚原あた
りまで流して来るさうだ、咳ながら虫のやう
な聲を張りあけて、

「按摩かみしも五百モーン」

こゝろふえ 終

釋宗活禪師著

獅子吼

禪に於ける化條氏は古來多く論せられて而も多々誤られたる國史上の一間
題なり宗活師舉揚の傍その燃犀の見を以て論破せられしもの請ひ得て今や
印刷中にあり

近刊
宗

太田みつほのや作

詩露草

こは作者が野に吹きすすみたる草笛の其節うつし留めて假りに斯くは名づ
けたるものなり、薙き歌は慰め與ふるに足らず新らしきものも聞くにふさ
はしからぬ此頃試みに耳貸して此集のもたらし來しものを聞き給へ

服部躬治作
一條成美繪

詩集

迦具土

定價金 四拾錢
郵税金 四錢

詩二百九十九首、盡十二葉共に會心の作を請ひ得て「かぐつち」成る、新に
藝苑に添ゆるの花、願くは摘まれて長しへに匂ふを得ん乎、

圓覺管長釋宗演禪師題字 釋宗活禪師述

性海一滴

定價金 二十五錢
郵税金 二錢

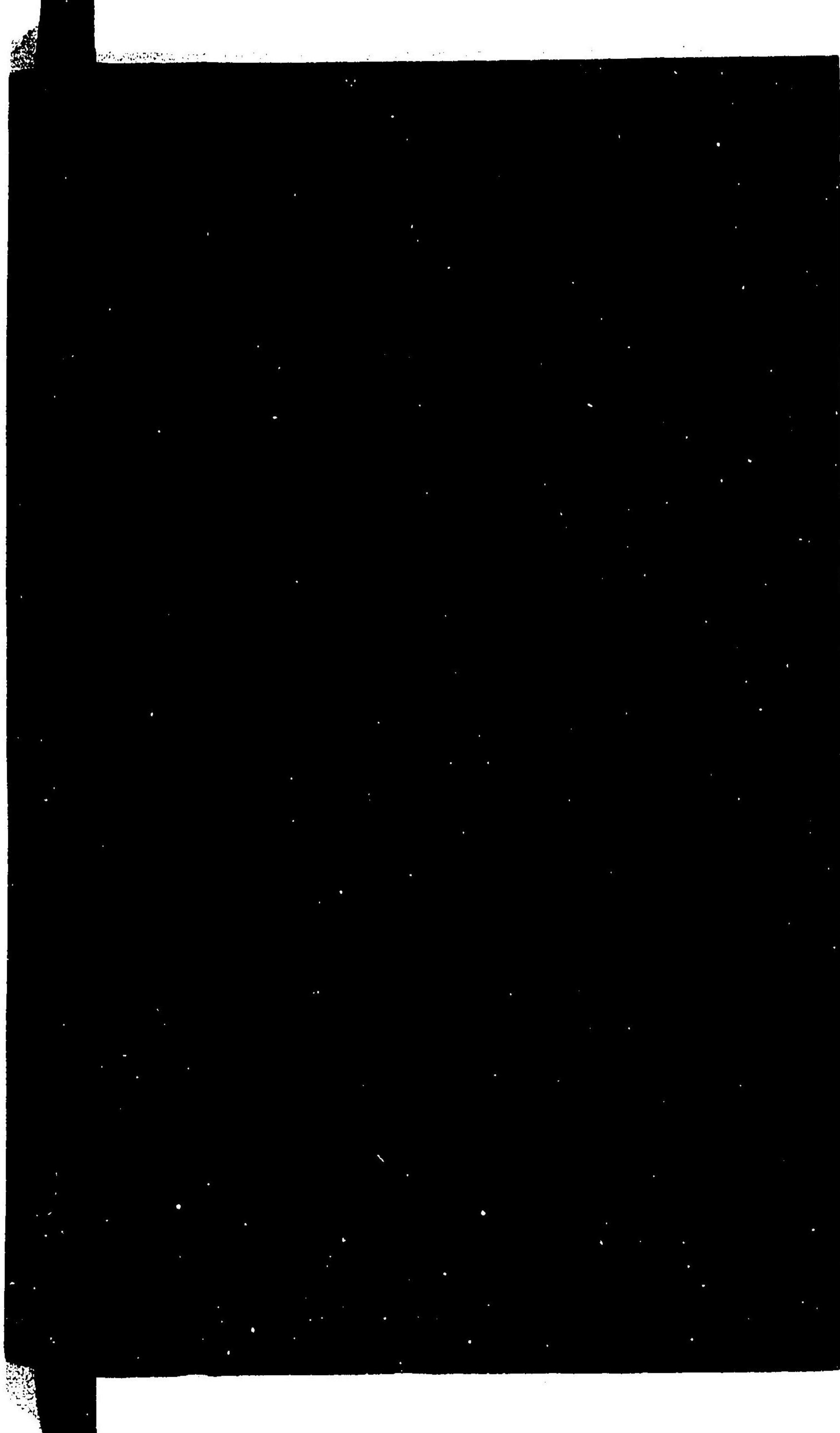
宗教を求むるの聲一般に高くして而も其真相を闡くの書に乏し、斯界の
憾とする處、本書はかの鎌倉楞伽老師の高足にして大事了畢の後久しく
暹羅に遊ばれたる釋宗活禪師の歸來來參居士の爲め擧揚せられたる活語に
て本社殊に請ひて弘通を許されたるもの總て「佛敎總論」「佛心宗史」「宗意」
「大道要訣」の四章とし簡明の筆を以て系統的に禪門の大意を傳へ餘蘊な
らんことを期せられたるものなり、もと禪は我國中世紀以後極めて世道人
心の感化多かりて教「性海一滴」は其然りし所以を傳へ更に現時に於て求
めらるゝ宗教の上に一大解答を與へんとするなり、

發行所

東京神田區佐久間町
四丁目十六番地

白鳩社

30
200



087034-000-7

30-200

こさふえ

秋元 洒汀/著

M34

DBE-0191



